

上伊那方言、推量助動詞、ダラの終助詞化現象

— 壮年層を中心として —

中 村 純 子

キーワード：上伊那地方、方言推量助動詞（-ダラ、-ズラ、-ラ）、終助詞化現象、壮年層

要旨

長野県上伊那地方では、共通語の「だろう」に対応する特色ある方言の推量助動詞、-ダラ、-ズラ、-ラが用いられている。なかでも-ダラは若年層、壮年層によって、-ズラに代わって使用されるようになってきている。しかし、-ダラは-ズラと比して1) 終助詞を下接しない、2) 従属節の述語の一部になりにくいという2点で、文法上での振る舞いに相違がある。本稿ではこの-ダラの終助詞化の現象を壮年層の調査を基に検証した。

1. はじめに

長野県の上伊那地方¹⁾（地図参照）では、共通語の「だろう」に対応する方言の推量の助動詞として、-ズラ、-ラ、-ダラが使用されている。なかでも-ダラは新しい方言形式で、愛知県・静岡県から下伊那を経て北上してきており、その分布は中村（1999）によって上伊那地方の最も北に位置する辰野町小野まで確かめられている。

上伊那地方で使用されている-ダラは主に若年層、壮年層で使用されている。それとともにこの年齢層における-ズラの使用が減少している。しかし、-ズラと-ダラの相違は使用層のみの相違ではない。-ダラは-ズラ、-ラと異なり、1) 終助詞を下接しない、2) 従属節の述語の一部になりにくいという特徴をもっている。

本稿の目的は、この-ダラの終助詞化の現象を、上伊那地方の壮年層を調査対象として探っていくことにある。

2. 上伊那方言の推量助動詞の接続と終助詞化

馬瀬（1992）によると上伊那地方では推量の助動詞、-ダラ、-ズラ、-ラは以下のように接続する。

- 1) -ダラ：動詞、形容詞、形容動詞、体言およびある種の副詞に接続する。ただし動詞・形容詞には形式名詞-ンを介して、形容動詞は語幹に接続する。つまり、-ダラは主として体言および体言格の語句に接続する。

例：雨ダラ、(雨ガ)フルンダラ、寒インダラ、静カダラ

2) -ズラ：-ダラと同様、主として体言および体言格の語に接続する。

例：雨ズラ、(雨が)降ルズラ、寒インズラ、静カズラ

ただし、本調査の対象地域、上伊那地方の4地点（中川村片桐、駒ヶ根市赤穂、伊那市上荒井、辰野町小野）（地図参照）のうち、辰野町では、動詞、形容詞に直接接続する形も残されている。（中村、1999：8）

例：今年モ 大雪ガ 降ルズラ、寒イズラ

3) -ラ：動詞、形容詞の終止・連体形に接続する。

例：今年モ 大雪ガ 降ルラ、寒イラ

このように-ダラと-ズラは上伊那地方では主に体言格の語句に接続し、承接が重なる地域が多い。また、-ラは用言に接続し、-ダラと-ズラに対して承接の点で相補分布をなしている。

-ダラは以下の2点で-ズラ、-ラに比して、終助詞化が進んでいると思われる。以下は中村（論者）の内省による²⁾。*は不自然なことをさす。（ ）はおよその共通語訳³⁾である。

1) -ズラ、-ラには種々の終助詞が下接する（馬瀬、1992：545）が、-ダラには下接しない。

明日 雪ズライ／*明日 雪ダライ（明日 雪だろうね）

明日 雪ズラナー／*明日 雪ダラナー（明日 雪だろうなあ）

明日 雪ズラ（イ）ネ／*明日 雪ダラ（イ）ネ（明日 雪だろうね）

明日 雪ズラカ↓／*明日 雪ダラカ↓（明日 雪だろうか↓）

今年モ大雪ガ降ルライ（今年も大雪が降るだろうね）

今年モ大雪ガ降ルラ（イ）ナー（今年も大雪が降るだろうなあ）

今年モ大雪ガ降ルラ（イ）ネ（今年も大雪が降るだろうね）

今年も大雪が降ルラカ↓（今年も大雪がふるだろうか↓）

2) -ズラ、-ラは従属節の述語の一部になりえるが、-ダラはなれない。

順接 明日 雨降ルラデ、花火大会ワ ヤランラ

（明日は雨が降るだろうから、花火大会はやらないだろう）

明日 雨ズラデ、花火大会ワ ヤランラ

*明日 雨ダラデ、花火大会ワ ヤランラ

（明日は雨だろうから、花火大会はやらないだろう）

逆接 明日 雪フルラケード、マラソン大会ワ ヤルラ

（明日は雪が降るだろうけど、マラソン大会はやるだろう）

明日 雪ズラケード、マラソン大会ワ ヤルラ

*明日 雪ダラケード、マラソン大会ワ ヤルラ

（明日は雪だろうけど、マラソン大会はやるだろう）

「だろう」相当の助動詞には推量といった言表事態めあてのモダリティに関わるものと、聞き手への確認要求・念押しといった発話・伝達のモダリティに関わるものがある⁴⁾。仁田(1989:3-4)によると「通常「だろう」相当の推量の助動詞は、発話・伝達のモダリティが希薄である」とされている⁵⁾。

しかし、-ダラが終助詞を下接しないことは、共通語の終助詞「ね」、「な」のように話者の最終的伝達態度を決定する働き、すなわち発話・伝達のモダリティが顕在化された形であることが考えられる。

また、従属節の述語の一部になりにくいことも、発話・伝達のモダリティが顕在化した形であることを示している。仁田(1989:2-5)は「言表事態めあてのモダリティを含む単語連鎖が文の一部になりえるのに対して、発話・伝達のモダリティを顕在化させた単語連鎖は、直接引用の場合を除いては、もはや文以外のなにものでもなく、文の一部には成り下がれない」と述べている。

このように-ダラが終助詞を下接しないこと、従属節の述語の一部になりにくいことは、-ダラが、推量といった言表事態めあてのモダリティのみではなく、常に積極的に聞き手に対して発話するという意味があり、かつその伝達の態度を最終的に決する意味までを含んでいること、つまり、終助詞化していることが予想できる。それに対し、-ズラ、-ラは「だろう」と同じく、推量といった言表事態めあてのモダリティが顕在化しており、聞き手への確認要求・念押しといった発話・伝達のモダリティに関わるものが希薄であるということが予想できる。

3. -ダラの終助詞化の調査

上記の-ダラの終助詞化現象、1)終助詞を下接しない、2)従属節の述語の一部になりにくいことが、上伊那地方の-ダラの使用者にどこまで観察できるものなのかを、地域、年齢を考慮に入れて調査した。調査の概要は以下である。

調査日時：2002年1月～2月 各30分～1時間

調査場所：上伊那郡中川村片桐、駒ヶ根市赤穂、伊那市上荒井、辰野町小野(地図参照)

被調査者：上記在住の若年層(15歳前後)および壮年層(35歳前後) 各1名×8

なお、本稿では紙幅の関係上、壮年層の調査結果のみを記す。

調査方法：質問票をもとにした聞き取り調査。上記の1)を検証するために、ダラ、-ズラ、-ラに方言終助詞を下接した文を作成した(表2参照)。選択した終助詞は、それ以上終助詞を下接しない、ネとナー、他の終助詞を更に下接するイとカである。また、2)を検証するために、-ダラ、-ズラ、-ラを従属節の述語に使用し、それを順接のデ(ので)と逆接のケード(けれど)と接続した複文を作成した(表3参照)。これらの文を調査者が読みあげて、被験者に「言う」、「言わないが、不自然ではない」(自分は使用しないが、周りには使用している)、「言わないし、不自然」の3つから選択してもらった。

【上伊那地方地図】

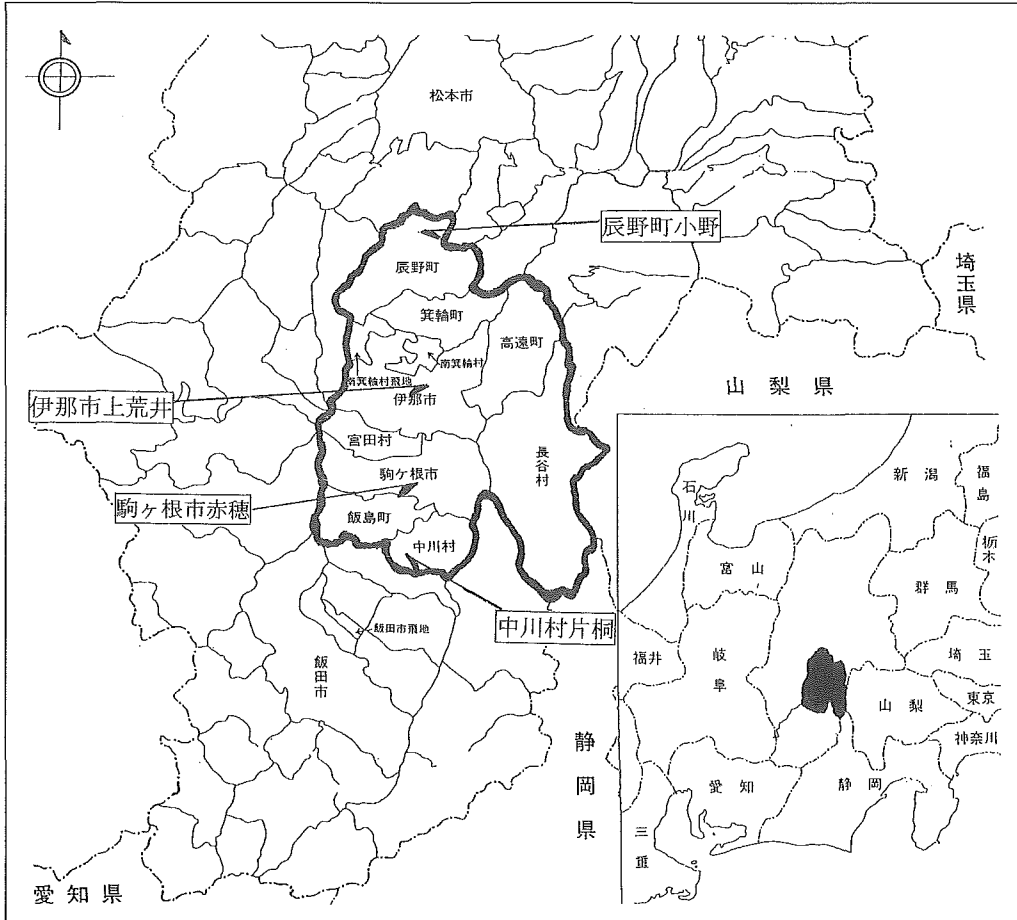


表1 【壮年層・方言推量形式の接続】

用法	提示文	中川・壮	駒ヶ根・壮	伊那・壮	辰野・壮
動詞＋ラ	今年モ大雪ガ降ルラ	◎	◎	◎	◎
動詞＋ズラ	今年モ大雪ガ降ルズラ	×	×	×	○
動詞＋ン＋ズラ	〇〇ワ東京ノ大学エ行クズラ	×	○	◎	○
動詞＋ン＋ダラ	〇〇ワ東京ノ大学エ行クダラ	◎	◎	◎	◎
形容詞＋ラ	今年ノ冬ワ寒イラ	◎	◎	◎	○
形容詞＋ズラ	今年ノ冬ワ寒イズラ	×	×	×	◎
形容詞＋ン＋ズラ	(アノ人ブルブル震エトル) 寒インズラ	◎	◎	◎	◎
形容詞＋ン＋ダラ	(アノ人ブルブル震エトル) 寒インダラ	◎	◎	◎	◎
名詞＋ズラ	(コノ寒サジャ) 明日雪ズラ	○	◎	◎	○
名詞＋ダラ	(コノ寒サジャ) 明日雪ダラ	◎	◎	◎?	◎?

言うー◎ 言わないが、不自然ではないー○ 言わないし、不自然ー× 言うかどうか分からないー?
以下同じ。

中川・壮、駒ヶ根・壮、伊那・壮、辰野・壮は、それぞれ中川村壮年層、駒ヶ根市壮年層、伊那市壮年層、辰野町壮年層を指す。以下同じ。

表2 【壮年層・終助詞の下接】

用法	提示文	中川・壮	駒ヶ根・壮	伊那・壮	辰野・壮
動詞+ラ+イ	今年モ大雪が降ル <u>ライ</u>	×	○	○	○
名詞+ズラ+イ	コノ寒サジャ、明日雪 <u>ズライ</u>	×	○	◎	○ ¹⁾
名詞+ダラ+イ	コノ寒サジャ、明日雪 <u>ダライ</u>	×	×	×	○ ¹⁾
動詞+ラ+(イ)+ナー	今年モ大雪が降ル <u>ラ(イ)ナー</u>	○ (○)	○ (○)	× (○)	○ (○)
名詞+ズラ+ナー	コノ寒サジャ、明日雪 <u>ズラナー</u>	○	○	○	○ ²⁾
名詞+ダラ+ナー	コノ寒サジャ、明日雪 <u>ダラナー</u>	×	×	×	○ ²⁾
動詞+ラ+(イ)+ネ	今年モ大雪が降ル <u>ラ(イ)ネ</u>	×	○ (◎?)	○ (○)	○ (○)
名詞+ズラ+(イ)+ネ	コノ寒サジャ、明日雪 <u>ズラ(イ)ネ</u>	×	◎ (×)	◎ (○)	○ (×)
名詞+ダラ+(イ)+ネ	コノ寒サジャ、明日雪 <u>ダラ(イ)ネ</u>	×	○ (×)	×	○ (×)
動詞+ラ+カ	今年モ大雪が降ル <u>ラカ</u> ↓	×	○	◎	×
名詞+ズラ+カ	コノ寒サジャ明日雪 <u>ズラカ</u> ↓	○	○	◎	○ ³⁾
名詞+ダラ+カ	コノ寒サジャ明日雪 <u>ダラカ</u> ↓	×	×	×	○ ³⁾

1)、3) 若い人が言ったら不自然 2) 雪ずらあ、雪だらあ ?言うかどうか分からない

表3 【壮年層・従属節の述語の許容度】

用法	提示文	中川・壮	駒ヶ根・壮	伊那・壮	辰野・壮
動詞+ラ+デ、	明日雨が降ル <u>ラデ</u> 、花火大会ワヤランラ	○	◎	◎	◎
名詞+ズラ+デ、	明日雨 <u>ズラデ</u> 、花火大会ワヤランラ	×	◎	○	○
名詞+ダラ+デ、	明日雨 <u>ダラデ</u> 、花火大会ワヤランラ	×	×	×	○
動詞+ラ+ケード、	明日雪が降ル <u>ラケード</u> 、 マラソン大会ワヤルラ	×	◎?	◎	◎
名詞+ズラ+ケード、	明日雪 <u>ズラケード</u> 、 マラソン大会ワヤルラ	×	○	○	○
名詞+ダラ+ケード、	明日雪 <u>ダラケード</u> 、 マラソン大会ワヤルラ	×	×	×	×

4. 調査結果

調査の結果を表1~3にまとめた。まず、地域別に被験者の-ダラ、-ズラ、-ラの用法を調べて表にした。(表1参照)。次に地域別に-ダラ、-ズラ、-ラの終助詞の下接の有無

(表2)、従属節の述語の一部となりえるか(表3)を被験者ごとに確かめた。以下順次、結果を記述する。

4-1. 方言推量形式の接続

4-1-1. 中川村・壮年層(中川・壮)

まず、動詞に接続する形の使用の有無を記述する。動詞+ラは「言う」、動詞+ズラは「言わないし、不自然」、また-ンを介した、動詞+ン+ズラも「言わなし、不自然」、動詞+ン+ダラは「言う」と答えている。

次に形容詞に接続する形の使用の有無をみていく。形容詞+ラは「言う」、形容詞+ズラは「言わないし、不自然」、-ンを介した、形容詞+ン+ズラ、形容詞+ン+ダラは「言う」と述べている。

名詞+ズラは「言わないが、不自然ではない」、名詞+ダラを「言う」と答えている。

4-1-2. 駒ヶ根市・壮年層(駒ヶ根・壮)

まず、動詞に接続する形の使用の有無を記述する。動詞+ラは「言う」、動詞+ズラは「言わないし、不自然」、また-ンを介した、動詞+ン+ズラは「言わないが、不自然ではない」、動詞+ン+ダラは「言う」と答えている。

次に形容詞に接続する形の使用の有無をみていく。形容詞+ラは「言う」、形容詞+ズラは「言わないし、不自然」、-ンを介した、形容詞+ン+ズラ、形容詞+ン+ダラは「言う」と述べている。これは、中川・壮と全く同じ結果であった。

名詞+ズラ、名詞+ダラは「言う」と答えている。

4-1-3. 伊那市・壮年層(伊那・壮)

まず、動詞に接続する形の使用の有無を記述する。動詞+ラは「言う」、動詞+ズラは「言わないし、不自然」、また-ンを介した、動詞+ン+ズラ、動詞+ン+ダラは「言う」と答えている。

次に形容詞に接続する形の使用の有無をみていく。中川・壮、駒ヶ根・壮と同様、形容詞+ラは「言う」、形容詞+ズラは「言わないし、不自然」、-ンを介した、形容詞+ン+ズラ、形容詞+ン+ダラは「言う」と述べている。

名詞+ズラ、名詞+ダラは「言う」と答えている。ただし、名詞+ダラは「言うかもしれない」というややあいまいな答え方だった。

4-1-4. 辰野町・壮年層(辰野・壮)

まず、動詞に接続する形の使用の有無を記述する。動詞+ラは「言う」、動詞+ズラ、動詞+ン+ズラは「言わないが、不自然ではない」、動詞+ン+ダラは「言う」と答えている。

次に形容詞に接続する形の使用の有無をみていく。形容詞+ラは「言わないが、不自然ではない」、形容詞+ズラは「言う」、-ンを介した、形容詞+ン+ズラ、形容詞+ン+ダラも「言う」と述べている。形容詞に直接-ズラが接続できる形の使用は他の3人の被験

者には見られなかった。

名詞+ズラは「言わないが、不自然ではない」、名詞+ダラを「言う」と答えている。ただし、伊那・壮と同じく「言うかもしれない」というあいまいな答え方だった。

4-1-5. まとめ

これらの結果から、上伊那の4地点では壮年層では名詞および体格言の語句+ダラ、用言+ラが主に使用されているといえる。しかし、-ズラと-ダラを併用している被験者も多い。また、辰野・壮の被験者は用言+ズラの形も使用していることが分かった。

以上の結果をふまえて、1) 動詞+ラ+終助詞、名詞+ズラ+終助詞、名詞+ダラ+終助詞の接続、2) 動詞+ラ+デ、名詞+ズラ+デ、名詞+ダラ+デ、動詞+ラ+ケード、名詞+ズラ+ケード、名詞+ダラ+ケードの使用の有無を被験者ごとに見ていくことにする(表2、3参照)。

4-2. 方言推量形式に終助詞が下接する用法

4-2-1. 中川村・壮年層

中川・壮は終助詞イの下接した、動詞+ラ+イ(以後、ラ+イと記す。他の終助詞も同様とする。)、名詞+ズラ+イ(以後ズラ+イと記す。他の終助詞も同様とする。)、名詞+ダラ+イ(以後、ダラ+イと記す。他の終助詞も同様とする。)は「言わないし、不自然」と答えている。

終助詞ナーの下接した形、またはイを介した形、ラ+ナー、ラ+イ+ナー、ズラ+ナーは、「言わないが、不自然ではない」としている。それに対して、ダラ+ナーは「言わないし、不自然」としている。

-ラ、-ズラ、-ダラに終助詞ネの下接した形、またイを介した形、イ+ネも「言わないし、不自然」と答えた。ただし、ラ+イ+ネは「言うかもしれない」と答えた。

終助詞カの下接した形、ラ+カ、ダラ+カは「言わないし、不自然」と答えている。ズラ+カは「言わないが、不自然ではない」としている。

中川・壮は終助詞の下接しない形、動詞+ラ、名詞+ダラは「言う」と答えている。名詞+ズラは、「言わないが、不自然ではない」と答えていた。しかし、上記のように終助詞が下接されると、ほとんど「言わないし、不自然」となっていた。特に、-ダラに終助詞を下接する形はすべて「言わないし、不自然」としていた。

4-2-2. 駒ヶ根市・壮年層

駒ヶ根・壮はイを下接した形、ラ+イ、ズラ+イは「言わないが、不自然ではない」、ダラ+イは「言わないし、不自然」と答えている。

次に、終助詞ナーの下接した形、またはイを介した形、イ+ナーは、中川・壮と同様で、ラ+ナー、ラ+イ+ナー、ズラ+ナーは、「言わないが、不自然ではない」としている。それに対して、ダラ+ナーは「言わないし、不自然」としている。

駒ヶ根・壮はイを介さないネのみの下接では、ラ+ネ、ダラ+ネは「言わないが、不自然

然ではない」と答えた。ズラ+ネは「言う」と答えた。イを介した形では、ラ+イ+ネは「言う」と答えた。ズラ+イ+ネは「言わないが、不自然ではない」、ダラ+イ+ネは「言わないし、不自然」としていた。

ラ+カ、ズラ+カは「言わないが、不自然ではない」とし、ダラ+カは「言わないし、不自然」としている。

駒ヶ根・壮はいずれも終助詞の下接しない形、動詞+ラ、名詞+ズラ、名詞+ダラは「言う」と答えている。しかし、既述のように終助詞が下接すると、「言う」というのは、「…降ルライネ」と「…雪ズラネ」だけで、他は「言わないが、不自然ではない」という答えが多かった。ダラ+終助詞は「…雪ダラネ」が「言わないが、不自然ではない」で、他は「言わないし、不自然」という答えだった。

4-2-3. 伊那市・壮年層

伊那・壮はラ+イは「言わないが、不自然ではない」とし、ズラ+イは、「言う」とし、「…雪ズライ」を「おばあちゃんに対しては言う」という答え方だった。ダラ+イは「言わないし、不自然」と答えている。

ナーの下接では、ラ+イ+ナー、ズラ+ナーが、「言わないが、不自然ではない」、ラ+ナー、ダラ+ナーは、「言わないし、不自然」と答えた。

イを介さないネのみの下接では、ラ+ネは「言わないが、不自然ではない」、ズラ+ネは「言う」、ダラ+ネは「言わないし、不自然」としている。次にイを介した形をみていく。ラ+イ+ネ、ズラ+イ+ネは「言わないが、不自然ではない」、ダラ+イ+ネは「言わないし、不自然」と言う答えだった。

カを下接した形では、ラ+カ、ズラ+カを「言う」、ダラ+カは「言わないし、不自然」としていた。

伊那・壮も終助詞の下接しない形、動詞+ラ、名詞+ズラ、名詞+ダラはいずれも「言う」と答えているが、終助詞が下接した形、ズラ、ラ+終助詞に関しては「言わないが、不自然ではない」という答えが多かった。ダラ+終助詞はすべて「言わないし、不自然」と答えていた。

4-2-4. 辰野町・壮年層

辰野・壮ではイの下接した形、ラ+イ、ズラ+イ、ダラ+イはいずれも「言わないが、不自然ではない」と答えている。ただし、ズラ+イ、ダラ+イを「若い人が言ったら、不自然」としている。

ナーの下接した形、それにイを介した形のラ+ナー、ラ+イ+ナー、ズラ+ナー、ダラ+ナーはすべて「言わないが、不自然ではない」としていた。ただし、ズラナーではなく、ズラアー、ダラナーではなく、ダラアーのほうが自然だとしていた⁶⁾。

イを介さない形、ラ+ネ、ズラ+ネ、ダラ+ネでは「言わないが、不自然ではない」としていた。またイを介した形、ラ+イ+ネでは「言わないが、不自然ではない」としていたが、ズラ+イ+ネ、ダラ+イ+ネは「言わないし、不自然」と答えていた。

カの下接した形、ラ+カは「言わないし、不自然」とし、ズラ+カ、ダラ+カを「言わないが、不自然ではない」と答えた。ただし、これも「若い人が使ったら、不自然」と答えていた。

辰野・壮は終助詞の下接しない形、動詞+ラ、名詞+ダラは「言う」と答えている。名詞+ズラは「言わないが、不自然ではない」と答えている。終助詞が下接した形に関しては「言わないが、不自然ではない」という答えが多かった。ダラ+終助詞も、ダラ+イ、ダラ+アー、ダラ+ネ、ダラ+カが、条件つきながら「言わないが、不自然ではない」としており、他の3地点の被験者と異同があった。

4-2-5. まとめ

全体に終助詞が下接しなければ、方言推量形式を使用するのに、下接すると「言わないし、不自然」となるもの、または「言わないが、不自然ではない」となる答えが多かった。「言う」としたのは、中川・壮のラ+イ+ネ、駒ヶ根・壮のラ+イ+ネ、ズラ+ネ、伊那・壮のズラ+イ、ズラ+ネ、ラ+カ、ズラ+カであった。

-ダラに関しては、辰野・壮が、ダラ+イ、ダラ+アー、ダラ+ネ、ダラ+カを「言わないが、不自然ではない」、駒ヶ根・壮もダラ+ネを「言わないが、不自然ではない」としていたが、中川・壮と伊那・壮はダラ+終助詞はすべて、「言わないし、不自然」としていた。更に注目すべきことは、-ダラに終助詞が下接した形では「言う」という被験者は全くいなかったことである。

4-3. 従属節の述語の許容度

4-3-1. 中川村・壮年層

まず、順接の従属節からみる。中川・壮は動詞+ラ+デを「言わないが、不自然ではない」とし、名詞+ズラ+デ、ダラ+デを「言わないし、不自然」としていた。

逆接の従属節では、動詞+ラ+ケード、名詞+ズラ+ケード、名詞+ダラ+ケードのいずれも「言わないし、不自然」と答えていた。

中川・壮は文末に使用する動詞+ラは、「言う」と答えているが、それが従属節の述語となると、順接では、「言わないが、不自然ではない」とし、逆接では、「言わないし、不自然」となっていた。文末の述語に使用する名詞+ズラでは「言わないが、不自然ではない」としているが、それが従属節の述語になると、順接でも逆接でも「言わないし、不自然」としている。-ラ、-ズラ、-ダラとも、従属節の述語の一部にはなりにくいということが言える。

4-3-2. 駒ヶ根市・壮年層

順接の動詞+ラ+デ、名詞+ズラ+デを「言う」としているが、名詞+ダラ+デは「言わないし、不自然」としている。

逆接の動詞+ラ+ケードは「言うかもしれない」とし、名詞+ズラ+ケードは「言わないが、不自然ではない」と答えている。名詞+ダラ+ケードは「言わないし、不自然」と

答えている。

駒ヶ根・壮は動詞+ラ、名詞+ズラ、名詞+ダラのいずれの形も文末では使用する。従属節の中でも-ラは使用している。また、-ズラは順接の従属節の述語の一部として使用し、逆接でも「言わないが、不自然ではない」としている。それに対し、-ダラは順接、逆接、両方で従属節の述語の一部としては、「言わないし、不自然」としている。-ダラは従属節の述語の一部になりにくいということがいえる。

4-3-3. 伊那市・壮年層

順接の動詞+ラ+デは「言う」としていたが、名詞+ズラ+デは「言わないが、不自然ではない」としている。名詞+ダラ+デは「言わないし、不自然」としていた。

逆接の動詞+ラ+ケードは「言う」とし、名詞+ズラ+ケードは「言わないが、不自然ではない」と答えている。名詞+ダラ+ケードは「言わないし、不自然」と答えている。

伊那・壮は動詞+ラ、名詞+ズラ、名詞+ダラのいずれの形も文末では使用する。従属節の述語の一部としては、-ラは使用している。-ズラも「言わないが、不自然ではない」と答えているのに対し、-ダラは使用していない。やはり-ダラは従属節の述語の一部とはなりにくいようだ。

4-3-4. 辰野町・壮年層

順接の動詞+ラ+デは「言う」と答えた。名詞+ズラ+デ、名詞+ダラ+デは「言わないが、不自然ではない」と答えた。

逆接の動詞+ラ+ケードは「言う」とし、名詞+ズラ+ケードは「言わないが、不自然ではない」と答えている。名詞+ダラ+ケードは「言わないし、不自然」と答えている。

辰野・壮は動詞+ラ、名詞+ダラは「言う」と答えている。名詞+ズラは「言わないが、不自然ではない」としている。それに対し、従属節の述語となると、-ラは順接でも逆接でも使用するようだが、-ズラのついた従属節は「言わないが、不自然ではない」と変化している。-ダラのついた従属節は、順接では「言わないが、不自然ではない」、逆接では「言わないし、不自然」としている。

4-3-5. まとめ

順接の従属節の述語の一部として、辰野・壮のみが-ダラを「言わないが、不自然ではない」としていた。他の被験者は「言わないし、不自然」としていた。それに対し、-ラは順接の従属節のなかでは、中川・壮をのぞいて「言う」としていた。中川・壮は「言わないが、不自然ではない」としていた。また-ズラは駒ヶ根・壮が「言う」、伊那・壮と辰野・壮が「言わないが、不自然ではない」、中川・壮は使用していなかった。

逆接の従属節に関しては、駒ヶ根・壮、伊那・壮、辰野・壮の結果は同じで、-ラは従属節の述語の一部として使用し、-ズラは「言わないが、不自然ではない」とし、-ダラは全く使用されていなかった。また中川・壮は-ダラ、-ズラ、-ラ、すべて従属節の中では使用していない。

以上のことから、-ダラが、-ズラ、-ラに比して従属節の述語の一部になりにくいこと

がわかる。

5. 考 察

上記の結果から、被験者ごと、地域ごとのゆれを認めつつも、-ダラは-ズラ、-ラに比して終助詞が下接しないということがいえる。また、従属節の述語の一部になりにくいこともがわかった。このことから-ダラには-ズラ、-ラと相違し、言表事態めあてのモダリティである推量系判断のモダリティのみが顕在化されている用法はないように思われる。つまり「明日大雪ダラ」（明日は大雪だろう）というような一見推量系判断のモダリティを表すように見える発話は、実は「明日は大雪だろうと私は予想するけど、あなたもそう思うだろう。」までの意味を含み、常に聞き手めあての意味を含んでいるという予想がたつ。

-ダラは不変化助動詞である。不変化助動詞が終助詞に近い働きをもっていることは金田一（1958）によって指摘されている。-ダラが終助詞化した結果、聞き手に対して、確認、念押しという発話・伝達のモダリティがより顕在化したといえるのかもしれない。

6. おわりに

本稿では壮年層を中心に述べてきたが、若年層は壮年層よりもさらに、-ダラ、-ズラ、-ラにも終助詞を下接しなくなっている。これは、方言形式そのものの性質が変わってきていることを示唆しているのではないか。つまり、共通語と方言のバイリンガルの年齢層にとって方言形式を選択するという、それ自体が、丁寧形を選択と同じように、積極的に聞き手を意識しているということなり、結果として助動詞は終助詞的役割をも兼ねることになったのではないかと考える。

また、本調査から上伊那の中でも辰野町小野の壮年層の被験者の結果は他の3地点と異動があった。この地域についてはさらに調査を要する。

注

1) 上伊那地方は行政的には長野県の南信地方に属する。南信地方は大きく諏訪地方と伊那地方に分けられ、伊那地方は更に、上伊那地方と下伊那地方に分かれる。馬瀬(1992: 448)によると、「方言の上では南信地方をひとつの方言地域として一括するには無理があり、諏訪地方と上伊那の大田切川以北の方言は、中信方言に、大田切以南の方言は(中略)南信方言にいれるのがよいと考える。なお、駒ヶ根市は天竜川の西の地域は南信方言に属するが、東の地域つまり中沢や東伊那の地域は中信方言に属する」とされている。まさに馬瀬も述べているが、上伊那方言は中信方言と南信方言の漸移地帯的性格を持っているといえる。本調査の調査地でいえば、中川村片桐、駒ヶ根市赤穂は南信方言に、伊那市上荒井、辰野町小野は中信方言に属することになる。

2) 論者の言語経歴を簡単に記す。

0～18才：長野県上伊那郡伊那市富県、18～22才：東京都国立市、22～28才：神奈川県厚木市、

29～34才：米国バージニア州、ハワイ州、34～38才：長野県駒ヶ根市、38～45才：長野県伊那市富県

- 論者は上記のように上伊那地方の出身ではあるが、生え抜きではないので、論者の内省だけでは方言推量助動詞の終助詞化の判断ができなかった。また各地域によっても相違のあるように思われた。それ故各地の被験者に依頼し、本調査を行った。被験者は伊那・壮を除き、各地の生え抜きである。伊那・壮は生え抜きではないが、祖母との同居も長く、言語感覚も鋭いので、被験者として依頼した。
- 3) 終助詞イの意味については、適当な共通語訳がない。馬瀬(1980:242-243)は、辰野町小野方言としてイ+ネについて、「ある判断に対して、相手の共感、同意を求める終助詞で、軽い敬意と親近感をこめる。活用語の終止形に接続する。」と記述している。そして「暑イズライネ」を「暑いでしょうね」と訳している。論者の内省では、イはネを後接するのみならず、-ラ+イ、-ズラ+イ、-ラ+イ+ナの用法でもよく使用されていると思われたので、本調査の提示文に使用した。ただ、イを介した用法、例えば「暑イライネ」(論者の出身地、伊那市富県では「暑イズライネ」という使い方はない)とイを介さない用法、例えば、「暑イラネ」の用法・意味の相違などは明確ではなく、今後精査を要する。
- 4) モダリティという用語は多くの研究者によって使われている。本稿では仁田(1989:2-3)の用語に従う。

言表事態めあてのモダリティ:

発話時における話し手の言表事態に対する把握の仕方の表し分けに関わる文法表現。

発話・伝達のモダリティ:

文をめぐって発話時における話し手の発話・伝達の態度のあり方、つまり、言語活動の基本的単位である文が、どのような類型的な発話-伝達の機能、役割を担っているかの表し分けに関わる文法表現。

- 5) 仁田(1989:3-4)はすべての文が言表事態めあてのモダリティと発話・伝達のモダリティを持っているということを主張する。しかし、すべての文が同じようなあり方・程度でこの両者のモダリティを有しているとはいっていない。「だろう」相当の推量を意味する形式で終る文は通常、発話・伝達のモダリティが希薄である…これを積極的に伝達しようとしなない伝達態度を表すと考える---ので、推量を意味する形式でおわる述語は従属節の述語の一部になりうるのだ。
- 6) このアーガナーと同様に扱ってよいのかは分からない。今後の課題とする。

参考文献

- 金田一春彦 1958 「不変化助動詞の本質」(上)(下)『国語国文』22-2、22-3
- 中村 純子 1999 「上伊那における推量助動詞-ダラの分布」『ことばの研究』第10号
長野県ことばの会誌
- 仁田 義雄 1989 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』
くろしお出版
- 馬瀬 良雄 1980 『長野県上伊那誌民俗編、下』 上伊那誌刊行会
1992 『長野県史、方言編』 社団法人長野県史刊行会